研究授業通信

古枝小学校
研究主任　松林　諒
令和四年度　５月２０日

６年生「跳び箱運動」

第２回目の授業研究は、６年生の跳び箱運動を行いました。
３つの研究内容について、先生方からのご意見・ご感想です。

研究の内容①「学習カード」

〇めあてやふり返りが書きやすいように工夫してあるところがよかった。
〇できた技にシールを貼らせることで、児童自身も自分の成長を感じやすく、また、友達同士で見せ合う時にも分かりやすいと思った。
〇レベルアップに注目しためあての立て方が示されていてよかった。
〇学習カードとネームプレートをおく用紙（掲示物）が同じで分かりやすい。
〇技と段数まで詳しくわかるので見やすい
〇めあて１の技をどう高めるかの視点を選択させたり、系統表を見ながらめあて２のもう少しでできそうな技を選んだりする点やふり返りの中で達成できたかどうかを書かせたり、ふり返りの視点を持たせたりすることで、次のめあてに繋がっていくという点は「個別最適な学び」が実現できていると思いました。「協働的な学び」に関しては、学習カードの中でどう具現化するか難しいなと思いました。
〇シールで達成状況を見れたのはよかった。
□学習カードをパッと見て、自分の達成状況が認められるといいと思いました。
□低学年は、学習カードの図にも書き込めるようにしてもいいと思った。
□低学年・中学年と学習カードの形をそろえることで、系統的な指導に繋がると思った。

研究の内容②「めあて・ふり返り」・・・同じ技に取り組んだ児童でふり返りの共有

□ふり返りの場面で藤武くんのふり返りが単元を通した目標と合致していたので、素晴らしいと思った。その時に、教師のフィードバックがあればもっとよかった。
〇高学年になると２つのめあての区別もつき、スムーズにできているなという印象を受けました。
〇ふり返りの書き方が定着しているので、めあてをおさえて、たくさん書けていた。
〇個人のめあてを拡大の系統図にネームプレートで貼ってあり、分かりやすかった。
〇ふり返りに、次の時間の見通しを書かせることで、次の授業の活力、見通しが持てるのでいいなと思った。
〇ボードでめあて１、めあて２の取り組む技を示すことで、パッと見て分かった。

研究の内容③「教材・教具の工夫」・・・児童の必要感に応じて

〇タブレットが有効に活用されており、撮影者からのアドバイスもあってよかった。
□授業の導入で、体育館横の掲示物にも多少ふれてもいいかなと思いました。
〇跳び箱の数も十分でたくさん活動できる場があった。

□壁面の掲示物に付箋、書き込みがあったがあまり活用されていないように感じた。
○ネームプレートをおくことで、教師の見取りにもなるが、児童がこれをしようと決めることもできるのでスムーズに活動に入れる。
○動画が見られるのはよい！自分で客観的に見て次の目標がつかみやすい。
□タブレットで動画を撮るポイントを伝えられていましたが、活用している子は少ないように感じました。かべに貼ってあった掲示物も見たり、付箋を書いたりしている子は少なかったように感じました。
○□場を固定せず、練習する人同士集まって、どういった場にしようか考えることは「協働的な学び」だなと思いました。その際に、工夫の仕方とか、こんな道具があるよといういくつかの方法を提示しておくのもいいかなと思いました。
○めあて２の場面で、台上前転に挑戦する児童用にマットを敷いて恐怖心を和らげるように工夫してあるところが良かった、児童もその場で自信をつけ、普通の跳び箱に挑戦していた。マットを敷いている跳び箱と普通の跳び箱を行ったり来たりして、技を確実に習得しようとする姿も見られた。
□待っている児童の並ぶ場所を、工夫すると協働的な学びが生まれやすいと思った。
□運動が苦手派としては、アイテムがあるとうれしいしやる気がでます。手足の置き場の目印とか。

その他

□めあて１とめあて２を時間で区切るのは、メリットもデメリットもあると感じました。「高める」と「挑戦する」と両方がいるとアドバイスをすることで自分も学ぶし、高める子も自分を省みて高まると思いました。
○活動に入る前、活動中に何度も安全面に関わる声掛けをされていてとても大事なことだと感じました。
○「できていない」ではなく、「ここまではできている」という肯定的な捉え方をし、子どもたち（特に技が完全にできていいない子）にたくさん肯定的な声掛けをされていて、これが意欲にもつながるし、じゃあどこができていないかを考えるポイントにもなるし、単元を通した大きな目標にもつながっていくなと感じました。
○児童数と跳び箱の数がちょうどよい。場の広さも取り組みやすい広さ。
○柿原先生の見本がすごい！やってみせられるのはいいなと思いました。
□「ふわっと着地で２秒静止」がとこまで定着していたのかが気になりました。
□見学の児童の役割が気になりました。
○「できた」と実感した児童がいて、単元の目標が達成できていました。
□「できた」の基準があいまいな子がいた。

参観していただいた先生方、貴重なご意見ありがとうございました。研究授業が終わったその日に、柿原先生から成果と課題を提出していただきましたので、それをふまえて・・・わたしなりに・・・

学習カード・めあてについて

今回の学習カードでは、取り組む技名とレベルアップの視点（いつでもできるように・段数を高くして・踏み切り調節版を使って）を選択するというめあての立て方、そして、

本時の活動を踏まえて次時に挑戦したいことを記述させるというふり返りの書かせ方をさせてありました。めあて→ふり返り→めあての流れで学習の足跡がわかりやすいものになっており、６年生という発達段階に合った、ふり返りの記述量や内容でとても良かったと感じました。また、児童一人一人に配布されていた技の系統表には、技名だけでなく、一つ一つに形態図が付いており、使いやすいものになっていました。低・中・高で形をそろえて使うことで、さらに良さを発揮するのではないかと感じました。

「個別最適な学び」は、答申の中でさらに２つに整理されています。

１つ目は『指導の個別化』。そして２つ目は『学習の個性化』です。『学習の個性化』を簡単にまとめると、個々の児童の興味・関心等に応じた異なる目標に向けて、学習を深め、広げる中で、自らどのような方向性で学習を進めていったらよいかを考えていくことです。なので『どのようにして』を記述する部分があると、よりめあてが明確になったのかなと思います。今回の学習カードでは、「開脚跳びの８段」や「かかえ込みとびをいつでもできるように」というめあての立て方になります。これを「開脚跳びの８段を跳ぶために着手の位置に気を付ける」や「開脚跳びの８段を跳ぶために７段で踏み切りを２０㎝はなしてできるようにする（踏み切りを強くする）」という『どのようにして』というところまで子どもが意識できるようにしておくと、やることも課題も明確になり、個別最適な学びに近づくかなと感じました。

『どのようにして』ということを踏まえて児童がめあてを書けるようにするためには、今回柿原先生が壁面に形態図を掲示していたように、「踏み切り」「着手」「空中姿勢」「着地」という跳び箱運動の４つの構造から子どもたちに視点を持たせる必要があると思います。　そのために・・・

ふり返りについて

今回の柿原先生の授業では、「初めてできた！」「わー！」「やったー！」という歓声がたくさん聞こえてきて、「できるを増やして楽しんでいる」子どもたちの姿をたくさんみることができました。友達の成功を自分のことのように喜んでいる姿には、クラスの良い雰囲気を感じました。新しい技ができた子に対して、先生が笑顔で拍手を送りながら一緒に喜んであげることや、友達が認めてあげることは、運動が好きな子供を育てる上でとても大切なことだと改めて感じました。教師の役割として、子どもが新しい技ができたときに一緒に喜んであげることが１番だとしたら、２番目は「どうしてできたの？」を考えさせることだと思います。もしくは、「おしい！」となった時「どこがおしい？」と思考を働かせるように問いかけることです。子どもたちは、何となくの感覚では分かっていますが、それを言葉にすることで、思考が整理されます。今回の場合は、「できたー！」「やったね！」「どうしてできたの？」と子どもとやり取りをして、４つの視点に目を向けさせることが大切だったのではないかと思います。そうすると、壁面の形態図をもっと活用したり、タブレットで自分の動きを客観的に見ることの有効性に気が付いたりして、さらに主体的に運動に向かう子どもの姿を見ることができたのかなと感じました。また、「どうして」という視点を持たせることで、自然と協働的な学びにもつながっていくと思います。そうした活動を通してふり返りを書かせると、「踏み切り」「着手」「空中姿勢」「着地」の４つの視点をもった「どのように」という記述がふり返りに見られるようになり、めあてにも「どのように」を書く必要感がでてきるのではないかと思います。

教材・教具について

柿原先生は、場の設定について子どもたちと一緒に考えられていました。「跳び箱運動でどんなことをしたい？」「跳び箱の数は？」「何段をだそうか？」といった具合に子どもたちと相談しながら、始めの場を作られました。古枝小学校の前校長である橋口先生や昨年度体育の指導に来ていただき、今年度もお世話になる藤井先生は、跳び箱の授業の最初は跳び箱１台しか場の準備をしないそうです。一台の跳び箱に子どもたちが行列を作って待っているところから、子どもたちの運動したい欲求を掻き立て、自分たちで学びをコーディネートさせるように仕向けられていました（想像も含みます）。柿原先生の意図もこれと同じで、自分たちで学びをコーディネートしていいんだという『個別最適な学び』を促す指導で大変良かったと思います。

また、研究授業だから、目新しい練習の場がたくさんあることが良いわけではないと思います。むしろ、工夫した場が０で子どもたちが一生懸命汗をかいて活動しているのなら素晴らしいと思います。普通の跳び箱で一生懸命練習をしている子どもが、掲示物を見ても、タブレットを見ても、友達と話し合ってもどうしてもできない、となった時に教師が提示する工夫された場に子どもは飛びついてくるのではないかと思います。今回の柿原先生の授業では、台上前転への恐怖心を取り除くための場が１か所と最後の方に頭はね跳びに挑戦する子に対しての練習の場が１か所の、計２か所しか工夫された場はありませんでした。しかし、最後のふり返りでは、半分近くの子どもが「新しい技ができるようになった人」で手を挙げていました。とても良かったと思います。

今日初めて開脚跳びの８段が跳べた子がみんなから称賛される場を柿原先生は設定されていました。

その後すぐに形態図の自分が気付いたコツを書き込みに行っていました。「みんなからほめられて嬉しかった」と言っていました。

台上前転の恐怖心を取り除く場を、めあて２の始めに提示されていました。

柿原先生、お疲れ様でした。柿原先生の実践を、これからの日々の実践に生かしていきましょう。ご質問等あれば、松林まで。次回は、６月１５日（水）に４年生の「跳び箱運動」を川崎由佳先生に提案していただきます。全体研になりますので、よろしくお願いします。